

「あの日」があつたから

★
看護職部門
入選

【茨城県・小林純子】

「力が足りなくて…。本当に申し訳ありませんでした」

そう言つて頭を深々と下げたまま、医師が涙をぬぐうと、続くスタッフの方々の目からも涙がこぼれ落ちた。

10時間前に救急搬送された息子の救命に関わつた医療スタッフの皆さんが、霊安室に来て下さつていたのだ。

「じゃあ行つてくるね」と短い言葉を残して登校した息子が交通事故に遭い、救急搬送されたと連絡を受けたのは家を出てからほんの1時間後だった。

学校に程近い救命救急センターに運ばれベッドに横たわる息子を見たとき、私は一瞬、母からナースに戻つていたのかも知れない。今まで何度となく見慣れた風景だったから…。この先の展開が手に取るようにわかる自分が嫌でたまらなかつた。

17歳の息子は、ほぼ即死に近い状態だった。

病室にか細く消え入るように鳴るモニターと人工呼吸器の音だ

けが響き渡り、それからの数時間は、まるで映画のスクリーンを覗いているかのような、実感のない時を過ごしていた。

頭が混乱して現実を受け入れられなかつた。医師や看護師さんの姿も声も、何も覚えていない。思考も心も凍りついたような感覚になりぼうぜんとしていた時、救命に当たつてくださった医師の声にはつとした。そうか、息子は死んでしまったのか…。

息子に関わつた医療スタッフ全員が涙を流して下さつていた。看護師さんのおえつが聞こえる。それは、人として息子の最期の数時間を見守つて下さつた、医療に関わる温かい、人の涙だった。

人の死に慣れる人間なんていない。人の思いは伝わるのだ。最期の場面でたくさん人の思いを受け取つた息子は幸せだった。

人生の中の大きな試練であったけれど、今も母は誇りを持って看護の道を歩いているのです。